

## 発掘調査の概要

### 甘檜丘東麓遺跡の調査(飛鳥藤原第171次)

甘檜丘は、多数の谷が入り込む複雑な地形で、今回の調査地も、南東に開く谷の一つに所在します。これまでの調査では、広範囲で建物・堀等が見つかり、7世紀から8世紀初頭に、谷を大規模に造成し、土地利用をおこなっている様相がわかっています。

今回は、2009年度の調査区の南側、谷の南東部分の谷入り口部付近から、その北東側の丘陵裾部にかけて、880㎡の調査区を設けました。調査期間は2011年9月22日から2012年4月26日です。

調査区北半の丘陵裾部は、後世の耕作で大きく削られています。調査区西南部は、南東に開く谷の北側斜面にあたり、南へと下がっていく地形ですが、この斜面を人工的に削って造成し、上下2段の平坦面を作り出しています。このうち、上段平坦面では、2009年度調査で一部が見つかった硬化面や石敷の続き、方形遺構、赤化面およびそれを覆う掘立柱建物1棟等が、下段平坦面では掘立柱建物1棟等が見つかりました。上段平坦面の上には、炭片や焼けた壁土が多量に混じった土が20cm程度堆積し、さらにその上に、上・下段平坦面を含む谷全体を一気に埋め立てた土が、厚さ1.5m程度堆積していました。これらの土層からは、7世紀中頃の土器が出土しており、上・下段平坦面の遺構は、いずれも7世紀前半から中頃のものと考えられます。

上段平坦面にある硬化面は、灰色や暗赤褐色を呈し、高熱を受けて硬化したものと考えられます。大きく3カ所に分かれ、うち、形状がある程度把握できた2カ所は、北北東－南南西に主軸をもつ細長い硬化面が、幅約1.6～2.0m、長さ約5mの範囲で残っています。北側がやや高く、緩やかな傾斜をもち、

窯の床面や地下構造の一部の可能性があります。

方形遺構は硬化面の東側で3基見つかりました。一辺0.8m程度の不整形方形を呈し、表面が赤化したり、焼けた壁土が堆積しています。その下部には、溝や土坑が付属しますが、性格は不明です。

赤化面は、黄色粘土の整地土が被熱したものと考えられます。硬化面の東側、方形遺構の南東側で見つかりました。東西約2.5m、南北約1mの範囲に広がります。これと重複し、1×1間で柱間寸法が東西約2.4m、南北約2.1mの掘立柱建物も見つかりました。これらは、<sup>おおい</sup> 炉と<sup>こなすみ</sup> 覆屋の可能性がありま

す。このほか、調査区西南辺には、北西から南東に流れる幅1.2～1.5mの石敷溝がめぐっています。

下段平坦面では、北北西－南南東に主軸をもつ南北2間×東西2間以上の掘立柱建物が見つかりました。柱間寸法は、南北約1.8m等間、東西約2.4m等間です。建物の周辺では、薄い粉炭の層と粘質土の層を交互に重ね、整地がおこなわれていました。

調査区西南隅では、谷部に堆積した炭のほか、建物にともなう整地層の粉炭層が一部露出したと考えられる炭溜まりが見つかりました。

今回検出した硬化面・赤化面・方形遺構は、窯、炉等、火を用いる生産関連遺構の可能性が考えられます。この場が一種の工場的な施設の一部であったことをうかがわせる発見です。従来、この谷では、7世紀前半から中頃に建物や堀が展開することが分かっていたましたが、谷の入り口部付近では、土地利用の様相が異なっていたことがわかりました。

ただし、今回見つかった遺構や遺物からは、何を生産していたのか等、その具体的な性格を直接示す手がかりは得られませんでした。現在、整理作業とともに、土壌サンプルや微細遺物の詳細な検討をおこなっています。(都城発掘調査部 清野 孝之)



調査区全景(西から) 右手前が谷入り口部



手前が方形遺構、奥に赤化面、硬化面(東から)